

いのち

(中)

橋田壽賀子

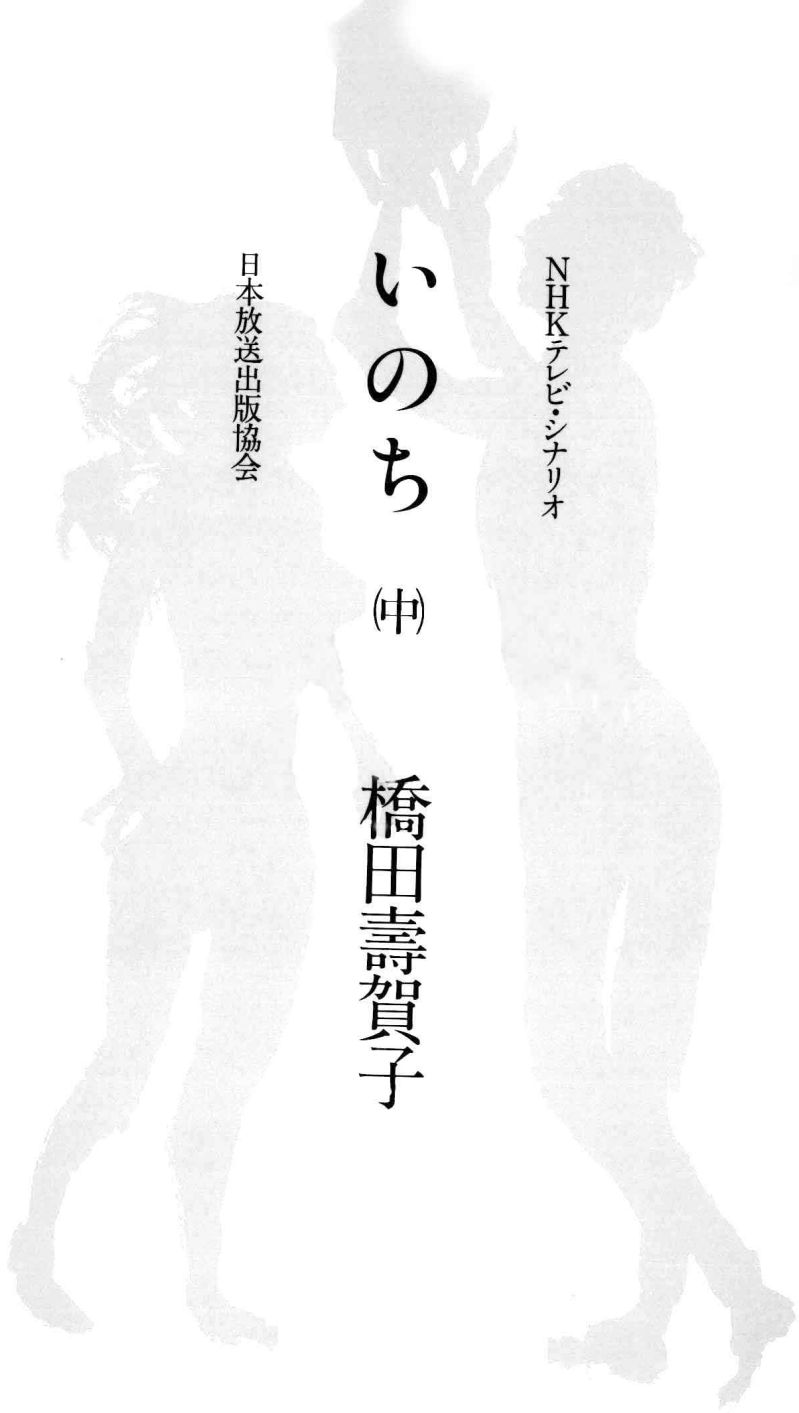
NHKテレビ・シナリオ

いのち

(中)

橋田壽賀子

日本放送出版協会





橋田壽賀子 (はしだ・すがこ)

大正14年京城で生まれる。日本女子大学国文科を経て、早稲田大学文学部芸術科卒業。昭和25年松竹脚本部入社、35年退社。以後シナリオ・ライターとして、数々のテレビドラマの脚本を執筆、あわせて劇作家としても数多くの舞台台本を手がけている。その幅広い活躍で、53年度放送文化賞を、また、「おしん」で59年度菊池寛賞を受賞した。代表作として、大河ドラマ「おんな太閤記」、銀河テレビ小説「となりの芝生」、朝の連続テレビ小説「おしん」がある。

NHKテレビ・シナリオ

いのち (中)

定価 一、四〇〇円

昭和六十一年七月二十日 第一刷発行

著者 橋田壽賀子

発行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四二一 (〒150)

電話 〇三—四六四—七三二一

振替 東京一—四九七〇一

編集協力 天野隆子／津島康一／ドラマ制作班

印刷 亨有堂／近代美術／千代田グラフィヤ

製本 石毛製本

検印廃止

© 1986 Sugako Hashida Printed in Japan

ISBN 4-14-005124-8 C0383 ¥1400E

(落丁本・乱丁本はお取り替えいたします)

い
の
ち

(中)

装 装
幀 画
蟹 田
江 代
征 素
治 魁

目次

27	母を待つ子……………	204
26	嫁姑……………	182
25	嫁の座……………	160
24	結婚式……………	138
23	愛あればこそ……………	117
22	ふれあい……………	94
21	新たなる旅立ち……………	72
20	愛の別れ……………	51
19	再会……………	29
18	友情……………	7

28	輝けるとき……………	226
29	走れ妹よ……………	247
30	津軽の少女たち……………	269
31	かあさんの味……………	291
32	東京へ……………	313
33	生きがい……………	334
34	いとしき妻……………	356

放送記録（大河ドラマ 毎週日曜日、夜八時～八時四十五分）
 中巻には、昭和六十一年五月四日放送の第十八回より、八月二十四日
 放送の第三十四回までのシナリオを収載しました。

●スタッフ

音楽

坂田晃一

制作

澁谷康生

デスク

山岸康則

演出

伊豫田静弘

富沢正幸

布施実

枘田豊

金沢宏次

小見山佳典

川口直次

大沼伸吉

広瀬洋介

小木新造

小館衷三

行天良雄

白石幸治郎

小泉清子

津島康一

相沢ケイ子

衣裳考証

方言指導

医事監修

監修

効果

技術

美術

●キャスト

未希

三田佳子

中川佐智

石野真子

邦之

渡辺徹

工藤清吉

大坂志郎

イネ

赤木春恵

岩田剛造

伊武雅刀

テル

菅井きん

亀夫

加藤明人

典子

清水愛

平吉

磯部勉

征子

小林綾子

絹子

川島千恵

昭子

大平江利子

八木金太

吉幾三

弘道

石田弦太郎

正枝

長内美那子

時枝

浅利香津代

浜村直彦

役所広司

とも子

小林千登勢

水田玲子

手塚理美

坂口一成

宇津井健

美代

野際陽子

村中ハル

泉ピン子

ナレーター

奈良岡朋子

友情

N——剛造の妻、初子を、自分の誤診で死なせたというシヨックから、津軽の家を出た未希だったが、上京して恩師の坂口一成夫妻やハルに会って、ようやく平静を取り戻し、津軽へ帰る気持になっていた。

津軽・高原家・庭(午後)

未希が旅から帰ってくる——“休診”の札がかかった診療所を見つめる未希。と、台所から出てきたイネが、びっくりしたように未希を見る。

イネ「未希お嬢さま……?!」

未希「ただいま」

イネ「(台所へ) 未希お嬢さまお帰りになりましたよッ」

佐智がとび出してくる。

佐智「お姉ちゃんッ」

未希「佐智……?」 どしたのッ。邦之さんとなにかあった

のッ……? それとも中川のお姑さんと……」
佐智「なにいつてるのッ、お姉ちゃんが家出なんかするから心配してえ」

イネ「未希お嬢さまがお帰りになるまで、お実家帰りなさせておいでであつたんですよ」

未希「なんだあ。夫婦喧嘩か、お姑さんとうまくいかなかった、中川さんそこ出てきたのかと思った」

佐智「呆れたあ、ひとのこと心配する柄ですかッ。勝手なことばかりしてえ」

と、そこへ、子供をおぶった母親、サトが駆けこんでくる。

サト「(未希に) ワイ、えふであつた。先生がバスから降りたの見だつて、父ちゃんが知らせできたハデ……。この子が昨夜がらなんも食べねで……。熱もあるハデ、うおのおぎ薬飲ませだばて、なんも効がねし……」

イネ「(サトに) お嬢さまは、今旅行がからお戻りになったどこだハデ……」

未希「(サトに) すぐ診療室へ行きます」

イネ「(未希に) お疲れだのに……」

未希「(佐智に) 悪いけど、診療所のドア開けて、診察の支度していて」

笑つてうなずく佐智。

サト「申しわけねごす」

とペコペコ頭を下げるサト。

同・診察室

佐智が手早く器具を揃えている——末希が入ってくる。

佐智「久しぶりだなあ、ここで手伝うの……」

末希「ごめんね、すぐあてにしちゃって」

佐智「みんな懐かしい……。お嫁に行く前のころ思い出した。(と笑い) どうぞ」

と待合室へ声をかける——子供を抱いて入ってくるサト。

サト「本当にえふてあった、先生がおいでにならねば、村は闇だハデ。うっかり病氣もでぎねって、みんな先生のお帰れば首長くして待っていだんですてす」

笑って子供の診察を始める末希。

サト「まあ、岩田の嫁こが亡くなるときも、先生はつきつきりであつたんだっての。親兄弟にも、でぎることだね。この村は、いい医者さまに恵まれたって、みんなよろこんでおります」

末希の顔色がかかる。が、

末希「ヤス子ちゃん、便秘してるんじゃないの？ お腹が

ずいぶん張ってるわねえ」

サト「そんですがあ。私はリンゴが忙しいもんだどこで、ばっちゃんがみてくれでるハデ、便のごとは、よくわがねふて……」

末希「(佐智に) 浣腸の用意してちょうだい。(とサトに)

あなたお母さんだから、そういうことも注意して、おばあちゃんとよく話し合っておかなきゃね」

サト「はい。(とホッとしたように) 悪い病氣でねふて、えふてあった」

末希「大人でも子供でも、便秘をばかにしちゃあいけないのよ。ほつといたら、とんでもないことになるときだつてあるんだから」

と、そこへ、若い男、源造がのぞく。

源造「ワイ、えふてあったじゃ。まだ休診だと思つていだばて、ひょっとしたらと思つて来てみたんだ。先生ッ、じさま倒れで……。来てみでけへんが」

末希「わかったわ、すぐ行きます。もし、脳卒中だといけなから、絶対動かさないようにねッ」

源造「はい」

末希「(佐智に) 往診の支度しといて」

笑ってうなずく佐智。

同・台所(夕)

清吉が畠から帰って足を洗っている――。

台所仕事をしているイネ。

清吉「そうが、元気で帰ってきたが……よがった」

イネ「それが、帰っておいでになる早々、患者さんで……。

今も新田のじさまが倒れだつて、往診に行がいだまん

ま……」

そこへ、佐智が奥から出てき、

佐智「お姉ちゃんおそいわねえ、患者さんが三人も待つて

るのに……」

イネ「お嬢さまがお帰りにつたのば、どこできいだんだ

べの、みんな……」

清吉「噂だなんて、あつてすまにひろがるもんだんだ。

(と笑い)それだけお嬢さまのお帰りを待つていだん

だべ、しばらく休診が続いだハデ」

佐智「お姉ちゃんも、とうとう村にはなくてはならないお

医者さまになつちやつたのねえ。少しは考えてもらわ

なきやあ……」

清吉「わかつておいでですよ。んだがら、お帰りにつた

んでありませんが。ほんとに安心した」

ホッとしている清吉。

岩田家・庭

夕暮れの中を未希が往診鞆を提げてくると立ち止

まり、じつと見つめる――竜夫と典子が大根を洗

っている。

未希の胸が痛む。

が、思いきつたように声をかける。

未希「偉いわねえ、お手伝い……?」

典子「先生……?」

未希「おばあちゃんやお父さんは……?」

竜夫「まだ畠……」

典子「戻るまでに、菜っぱど大根洗つておげつて、しゃべ

らいだの」

未希「大変ねえ」

竜夫「母^かちやがいなくなつたんだハデ、しかだね」

典子「私^{おち}、御飯^{まん}だつて炊けるッ」

未希「そう……。ね、タツくんとノンちゃんにお土産買つてきたの。ちよつとうちへいらつしやい」

意外そうに未希を見る竜夫と典子。

そこへ、テルが小走りに帰ってくる。

テル「悪くてあつたな、おそぐなつてまつて。(と未希に

気づき)未希お嬢さま……? お嬢さまがお戻りになつたつてきいだもんで、今夜にでもお礼にうがうべ

ど思っていでんです。初子のごとでは、ひとがだならねお世話になりして……。ゆっくりお礼も申しあげねうちに、旅行にお出がげになったもんだハデ、そのままになってままって……」

末希「いいのよ、お礼なんて……。それより、初子さんの初七日にうかがえないで……」

テル「おかげさまで無事にすませした。この子たちも、少しずつ母親のいねごとに慣れできたやうで……。〔と竜夫と典子に〕腹へったべ、すぐ夕飯の支度してやるハデな。〔と末希に〕どうぞお上がりください」

末希「今往診の帰りの。ちょっと気になって寄ってみただけだから……。明日にでも、あらためて初子さんにお線香あげさせていただくわ。おばさんもお忙しいやうだし……」

テル「初子がいなくなったら、畠も人手が足りなくなってままって……。そのうえ母親の役目がら家のことまで、一切私がやねばマイネンですす。この子たちさ手伝わせるってしたって、役には立だねし……。なんてしたって、まだ母親の恋しい年だハデネシ。それも不憫で……」

末希「〔つらそうに〕タックくんもノンちゃんも寂しかったら、うちへいらっしやい。私はいつも診療所にいるか

ら、なにかあったら面倒みてあげられるわ」

テル「とんでもねえぞ。お仕事のお邪魔になるえんだごどッ……。初子が元氣だときでも、みんな日中は畠さ出でいで、子供だちば、かまってやる暇だなんてなくてあったんです。夜は父親も私もいるんだハデ、お嬢さまにご心配いだぐごとは……。〔と竜夫と典子に〕な、母ちゃがいねふても大丈夫だよな、ばっちゃがついでるものな」

が、寂しそうな竜夫と典子。

それへ、

末希「じゃ、お土産あとで持ってくるわね」

テル「……？」

末希「〔テルに〕東京でつまらないもの買ってきたの」

テル「そした……。そしたごとしていだだいでは、逆さまですす。初子のごとでは、さんざんご迷惑かげだうえに……」

末希「私には、それくらいのことしかできないの。でも、これからタックくんやノンちゃんの力になれることがあったら、どんなことでもさせてもらうつもりですから……」

テル「お嬢さま……〔と涙ぐむ〕」

末希「〔竜夫と典子に〕タックくん、ノンちゃん、先生もこ

の村で頑張るから、タックくんもノンちゃんも頑張つて……。先生と一緒に頑張ろうねッ」

じっと未希を見つめる竜夫と典子——いつ帰ってきたのか剛造がそんな未希たちを見つめている。

未希、気配に振り向いて剛造に気づく。

未希「剛ちゃん……」

剛造「お嬢さま、ありがとうございます。ありがとうございます。いますッ」

ただ頭を下げる剛造の目に涙がにじんでいる——
つらい未希。

高原家・居間（夜）

未希が、風呂から上がってくる——佐智、清吉、

イネ、邦之が見迎える。

未希「ああ、いいお風呂だった。やっと疲れがとれたわ。

（と邦之を見）邦之さん？」

邦之「お帰りなさい」

佐智「お姉ちゃんが帰ったって電話したら、来てくれたの」

未希「ごめんなさい、心配かけて……」

邦之「心配なんですよね。おなじ医者として、初めて
親しい患者に死なれたショックもわかるし……」
も、未希さんなら、必ず立ち直って、この村へ帰って

くるって信じていましたがね（と笑う）」

イネ「さあ、お夕飯にしましょう。次から次へど患者さん
で、すっかりおそぐなまって……（とさっさと膳
の支度をする）」

佐智「（手伝いながら）ありがたいことじゃないの、みんなに頼りにされて……」

邦之「そうですね。それだけ信用されているんです。たつたひとりのことで、クヨクヨしてる場合でないでしょう」

未希「わかっているの。うれしかったわ。今日だってこんなに患者さんが来てくれて……。勇気がわいてきた……」

清吉「新田のじさまは、やっぱし、あだったんですが？」

未希「私も脳溢血かと思っただけで、軽い心臓の発作だったの。でも、だいぶ動脈硬化があるから、今までみたいにお酒飲んでたら、明日でも迎えが来るかもしれないって、おどかしてきた」

清吉「（笑って）そいだよ、いいことなさいました。あのじさまの酒ぐせの悪いのには、家族が随分泣かさいでしたんです。お嬢さまがきびしくおっしゃたら、少しは酒控えるようになりますでしょう。未希お嬢さまがここで開業なさって、肺病の患者が何人もよくなつたってすんで、未希お嬢さまのごとば、神さまみだい

に信じてる男だハデネシ」

未希「肺結核がよくなったのは、ストレプトマイシンのおかげなのねえ。(と笑い邦之に) 邦之さん、私はもう大丈夫ッ……。安心して佐智を連れて帰ってください。中川さんにもご迷惑をかけてしまつて……」

邦之「佐智がいただければ、まだいいですよ。おふぐろには、うまくしゃべっておぎまですがら」

佐智「いいの。十分のんびりさせてもらつたし……お姉ちゃんか帰ってきたら、清さんもイネさんも寂しくないでしょう。そろそろ中川の家が恋しくなっちゃつた」

清吉「佐智お嬢さまも、すっかり中川のおひとになつてしまわいだんだネシ」

未希「それでいいのよ。今夜は邦之さんに泊まつていたいて、明日一緒に……」

笑顔でうなずく佐智。

邦之「おふぐろがよろこぶぞ。毎晩のように、サッチャがいないと、歯が抜けだみたいで寂しいってしゃべつていだ。肩もんでくれるひともないし」

イネ「あれー、佐智お嬢さまは、毎晩姑さまの肩もんでおあげになるんですか？」

佐智「サッチャんは上手だって、そりゃあよろこんでくださるのよ。張り合いがあるの」

清吉「そいだば、佐智お嬢さまのごとも、もう私たちが心配すごともねネシ」

イネ「姑さまに可愛がつていただげるのが、いちばんなんですがら……」

邦之「佐智が、よくつとめてくれるもんで、今のところはなんとが……。 (と笑い未希に) 東京さ行つていらしたそんですけど、一成おじさんやハルさん、元気ですか？」

未希「坂口先生は相変わらず第一線で活躍していらつしやるようだけど、ハルさんが……」

清吉「なにが、あつたんですか？」

未希「一緒に出版社始めた健作さんと、うまくいなくて……」

清吉「あの男、やっぱしハルさんの金目当てで、つぎ合つてらんだべの」

未希「そうじゃないの。ハルさんが出したお金はちゃんと返してよこしたんだけど、結局健作さんは、ほかの娘さんと結婚することになったとかでね」

清吉「だまさいでいだんですが、ハルさんッ」

未希「ハルさんと健作さん、結婚の約束なんかしてなかつたんですって……」

清吉「そしたばがだッ……もう三年以上も、一緒に仕事し

てきて……」

未希「ハルさん自身が認めてるんだもの。でも、ほんととはハルさん好きだったと思うの、健作さんのこと……」

それだけに、笑って諦めてるハルさんが気の毒でねえ」佐智「どして、ハルさん津軽へ連れて帰らなかったのッ。

ひとりですらい思っているなんて可哀想じゃない」

未希「誘ったわよ。出版社と縁が切れたら、東京にいても

しかたないだろうし……ここなら気もまぎれるだろうと思ったから……でも、することがあるからって」

イネ「大丈夫だが、いつがみだいに、まだ海さとびこむようなことになったら……」

未希「今は十年前のハルさんとは違うわ、もっとたくましくなってると思うけど……」

イネ「よくよく男運の悪いひとだんだネシ。あしたに気持ちのあったかい、さっぱりしたひとだのに……」

未希「やっぱり、無理にでも、一緒に帰ってくればよかったのかもしれないわねえ。東京でヤケにでもなったら

……」

ふと不安そうになる未希の顔。

東京・坂口家・居間(夜)

ハルが一成と話している——そばできいている美

代。

一成「アメリカ留学っていったって、そう簡単にはねえ」ハル「わかっています。昔、未希さんに英語のラブレターの

代筆頼んであげたりしてた女の子が、アメリカ人と結婚して、今東京にいるんですけど、その子のところへ

も行って、きいてきました。そしたら、アメリカに身元引受人がいて、留学の理由が認められたら行けない

ことはないうっていうんです」

一成「そりゃそうだがね、留学費のドルの問題もあるし……」

ハル「お金なら二百五十万あります」

美代「ハルさん、そのお金は……」

ハル「健ちゃんから返してもらわなかったと思えば……どうせ返してもらうつもりなんかあったんです。健ちゃんに注ぎこんだと思ったら、惜しくはありません。

そのお金で、未希さんが留学できるのなら、二百五十万だって生きたお金になります」

顔を見合わせる一成と美代。

ハル「ばかな話ですけど、私は、いつか健ちゃんと結婚できるもんだと思ってつき合ってきました。お金さえあ

ったら、男のひとだって自由にできると信じて、健ちゃんに好きなことをさせたんです。でも、見事に裏切

られて……もう、お金も信じられなくなりました。な

まじお金を持ってたから、四年もむだにしてしまったんです」

美代「（やりきれないように）ハルさん」

ハル「（笑って）後悔はしてません。四年間、夢みさせてもらったんです。夢を買ったと思えば、惜しくはないし、返してもらったお金にも、なんの未練もありません。でも、もしそのお金で、未希さんのしあわせを買うことができるんだったら……」

一成「……」

ハル「私は男運に恵まれなかったけど……いえ、恵まれなかったから、せめて、未希さんには好きなひとと一緒にさせてあげたいんです。未希さんは直彦さんが好きなんです。でも、直彦さんはアメリカへ行ってしまった、二年も別れ別れになっていたら、男と女の仲なんてどうなるかわかりやしません。そりゃあ、未希さんの気持は変わらないでしょう。けど、直彦さんは男です。アメリカの新しい文化を身につけた女たちに囲まれていたら、津軽でくすぶってる未希さんのことなんか、色あせて見えるようになるかもしれません。それじゃあ待ってる未希さんは浮かばれやしない。夢を抱いていた男に裏切られるみじめさは、私ひとりではなく

さんです」

一成「直彦君は、そんな軽薄な男じゃないよ。また留学中は、女性に心を奪われてる暇なんてありやしない。それは、私も経験しているからよくわかる。第一、そういう浮いた動機で未希さんに留学をすすめるなんて、私は反対だね」

ハル「もちろん、それだけじゃありません。未希さんに直彦さんとおなじ勉強をさせてあげたい……。未希さんと直彦さんは、一生を農村医療に捧げようって約束してるんです。一生、おなじ道を歩いていくのなら、直彦さんとおなじようにアメリカで勉強して、直彦さんといつも一緒に歩けるようにしておいてあげたいんです。一年でもいい、外国でおなじ体験をしたっていうことは、お互いに強い絆にもなるような気がするんです」

うなづくようにきいている美代。

が、一成はただ黙っている。

ハル「それに、アメリカで勉強するのは、未希さんのためにだってプラスになるんじゃないんですか？ それとも、未希さんには留学する資格がないと思いませんか？」

一成「いや、未希さんは立派な医者だ。農村医療にも真剣